

# 小さなグルーブ活動からロシアとの民間交流へ

女性の視点を活かした地域活動から日露民間交流へと、その輪が拡げてきた「ひめぼたるの会」。次世代を担うロシアと島の子どもたちのこれからは。ささやかな活動から行政を動かし、自立への道筋を探る。

## 勉強会からスタートした「ひめぼたるの会」

日本海・島根半島の沖合いに浮かぶ隠岐諸島は、豊かな自然、都の香りが漂う歴史の島としてその名を知られています。その中でも西ノ島町は、隠岐の景勝を代表する国賀海岸をはじめ、後醍醐天皇の配流の地としても有名です。町の人口は三四五五人（平成一九年六月現在）で、少子高齢化が進んでいます。平成一〇年に発足した「ひめぼたるの会」のメンバーは、勤め人がほとんどです。自分たちの職場のなかにある問題点や課題を互いに勉強し合う会と

して発足しました。たとえば、障害者への偏見をなくし、安心して地域で暮らせるための福祉フォーラムや介護保険などをテーマにした勉強会を開き、住民への啓発活動へと発展させてきました。また、地域の自然保護に努めることを目標に、ホテルの成育地マップづくりや、ホテルの観賞会を「こどもエコクラブ」と一緒に実施し、自主的な企画づくりなど会員がそれぞれの役割を発揮し、参加型の催しを実践してきた経緯があります。

**依存要望型から自立参加型へと意識改革のチャンス**

平成一三年八月、隠岐の島町で「島は沈んでしまうのか!! みんなで考えよう隠岐の未来!!」と題したシンポジウムが開催されました。一四度末で期限が切れる離島振興法の改正・延長がぜひとも必要、ということが前提にありました。

第五次までの離島振興法の下では、ハード施設整備が主で、基幹道路の整備、ダムの建設、高速船レインボーの就航、各町村の公共宿泊施設の整備などがすすめられ、どちらかといえば「男性型島おこし」が先行していた時代でした。シンポジウムでは町村合併が大きな問題として浮上していました

が、合併議論の前に、「これからは住民主体で自分たちの町をどうするかが大切。地域資源の活用、自然や歴史、伝統文化を活かした地域活動の促進が問われ、とくに女性の感性を活かした斬新なアイデアが必要だ」と強く感じました。

いまこそ私たち住民が、自分の住んでいる地域の良いところを積極的に見つけ、いろいろな角度から島の未来を考え、民間と行政とが連携をとりつつ、「こう変わらなければならぬ」と将来像を描く大切な転換期ではなからうか、と示唆を受けたのです。

振り返ってみれば、このシンポジウムが大きなきっかけとなり、現在の「ひめぼたるの会」の活動につながっているように思います。

## 四季の豊かさを大切に、次世代に伝えよう隠岐の宝

このシンポジウムの後、一一月には関連事業のワークショップを行うチャンスがあり、「隠岐地域の特性である

自然環境や優れた人材を生かした町づくり」をテーマに、意見交換会と、まちづくりの専門家・猪爪範子氏（地域総合研究所）を招いての講演会を開催したところ、大勢の方々が参加しました。参加者の感想文や、実行委員などの意見をもとに、KJ法を駆使してカードで分類し、すぐにみんなで結果をまとめ、今後の方向性と住民の意向を次のように見極めることができたのです。

### 今後取り組みたいこと

- ・小グループごとの女性活動計画を作りたい（事業化できる企画を実行したい）
- ・学校との地域間交流
- ・体験型観光との連携
- ・基本的にすぎべき考え方
- ・隠岐島は不利だと考えない（都会とは異なる良さを町民も認識すべき）
- ・島の子どもたちに「これだけは伝えたいこと」を絞り込む（ふるさとの思い出を残す体験の場づくり）

・I・Uターンの人の意見も聞いたり、外の目、内の目の両方で島を見る

・自然や文化を大切に、四季を通じての行事や食事を組み合わせるの効果が活用

行動を開始したい機運が満ち溢れていた

- ・機会があったら自分も活動したい
- ・気楽に、無理せず参加できる機会がほしい

・新しい考え方を知り、自分も変わりたい

### ツリー型からリズム型へ

その後、新しい小グループ「季の会」が誕生しました。四季を通じてストーリー性のある行事と食事を組み合わせるレシピづくりや、学校との交流を重ねての行事食づくりなど、「地域の助け人」として参加し、海や山の宝探しとその活用、俳句や茶道など会員の特技も発揮され、ともに学び合う機会が増えてきています。

その他にも、福祉関係のグループ活動や、「よろず朝市場」の開催が継続されています。手づくり品グループや個人が、この島にしかない作品を考案して商品化もしています。これからの活動は、命令されながら統括される〈ツリー型〉ではなく、ぶどうの房のごとく一つ一つの粒が光り、横につながる〈リゾーム型〉でまとまり、必要があれば、町づくり活動へとまとまって行動し、さらには知識や技術を交換し合う島内外とのネットワークができればと望んでいます。

西ノ島町の花として「やぶ椿の花」が昭和五七年に指定されています。自生している椿の木も多く、大山地区では現在、「夢ファクトリー 生き甲斐対策の事業」として、椿の実から採集した油を製造販売しています。その提案は、町議会で長崎県対馬へ研修に行った時にヒントを得て応用し、担当課で検討を重ねて取り上げていただき、実現したものです。

椿の実の収集は住民から募り、昔か

ら伝わってきた知恵なども活かして商品化となりました。同時に道路や新しい公共の建物周辺にも大切な照葉樹として椿を増やしています。海や川をきれいに、そして花が楽しめる町づくりに発展することを願うことでした。いま、少しずつですが道路拡張時にも植樹され、小さな椿の花が咲きかけています。

### 日露の民間交流と「ウラジオストク ビエンナーレ」への参加

このように、次世代を担う人づくり活動を中心に、女性の視点で町の活性化を目指しながら、福祉関係や、自然環境の保全などの学習会と啓発活動を積み重ねてきました。

平成一七年には日露戦争終結一〇〇年目を迎え、島根県でもロシア沿海地方と友好交流が結ばれてから一五年目にあたり、県や民間団体など多方面にわたり交流関係が継続されています。

隠岐には、日露戦争の日本海海戦（明治三八年）時に漂着したり、船で

引き揚げた多くのロシア水兵を葬った墓が各地に建てられており、現在も引継がれ続けているところがあります。西ノ島では、船越や大山をはじめ、その他の地区にも多く残っています。島の先人がなした行為には、国境を越えた人間愛を感じ、一〇〇年前の地域の人々の熱い心、深い情けを誇りにも思っています。

そこで、一八年二月には、時代の流れとともに、人々の心の中から薄れていく郷土の歴史を論文発表されている島根県立松江工業高校の岡崎秀紀先生を招き、町民講座「日露民間交流事業 in 西ノ島」を開催しました。ロシア水兵墓は私たちの生活圏のすぐ近くにありながら、一般の地元の若い人にはあまり知られていない状況でした。この話は、小学校の副読本に「海を越える愛」として記載されています（注）。地元の小学校では、総合学習の場で学ぶきっかけづくりともなります。会場では、ロシアの子どもたちの絵画展も開き、地域の記録から歴史や人々の思

いを学びながら世界の視野を広めることのできる機会となったのです。

展示されたロシアの子どもたちの絵の表現力と技術の高さに感動して、絵画展に参加した小学生から感想文が届けられました。あまりにもリアルに表現されているので県の国際交流員に感想文を訳してもらい、ロシアのそれぞれの作者に届けるように働きかけたのです。その後、ロシアの子どもたちから、「今度はあなた方の芸術品が見たい」という返信があり、子どもたちも大喜びでした。

このやり取りをきっかけに、今年六月二八日～七月五日、ウラジオストク市で開催される芸術の祭典「第五回ウラジオストク・ビエンナーレ」に、島前三町村の絵画展で入選した絵画三四点と習字二六点、計六〇点を出展する運びとなりました。このビエンナーレは二年に一度開催される文化事業で、韓



西ノ島・船越奥の谷墓地に残る「露兵二名之墓」。

国、中国、アメリカからも参加があり、日本からは東京、秋田、新潟、富山などから八〇余人、島根県は民間から二人が参加しました。

島根の展示コーナーは、「神話の国・しまね」というテーマで「神話・伝統」「民具」「玩具」「茶道体験」の四つのコーナーに分けられ、壁には隠岐島前の小中学生の絵画や習字作品が展示されました。一四〇〇人あまりの参観者があり、「島の子どもたちのエ

ネルギーを感じた」との感想をもらったのです。

習字の作品については絵画で感想文をやりとりしたウラジオストク第五一貫学校（一～一一年生の一貫校で、一九八八年から日本語教育に取り組んでいるリーダー的存在）から「教材にしたい」との要望があり、贈呈することになりました。

島の子どもの素直で自然体の描写や、独特な表現の版画などに大変な感心が集められました。二期期になれば感想文が届く予定で、新たな交流の芽を確認することができました。

### 民間交流として できたこと

日露戦争によるロシア兵の漂着と埋葬という隠岐の先人の史実は、シンポジウム会場で隠岐とロシアのかかわりについて発表の場がありました。その

後の子どもたちとの交流などについても参加者から大きな反響があり、今後とも平和的友好を望まれました。

最終日には、ウラジオストク市に隣接するアルチョム市八K地区にある日本人墓地へ政府の車で参拝することができ、菊の花、線香を供えたときは感無量でした。報告会は、二学期早々に総合学習の場で学校側が主体となり開



西ノ島で開催した「日露民間交流町民講座」。

催される予定で準備がすすめられています。

このビエンナーレへは、松江市にある「ロシアを理解する市民講座」の会員や、「ヒューマンアンドジオサイエンス」（人と地球科学をつなぐ研究者や技術者などを中心とした国際グループ）の民間の方々、隠岐の島町のメンバーなども加わり、町民講座「日露民



ロシアからの絵を鑑賞する西ノ島・美田小の児童たち。

間交流事業 in 西ノ島」から始まって、島内外へも動きのある交流になりました。また、隠岐のもつ資源を人脈によって掘り起こされた作業でもあり、島と島がつながり、民間人同士が一緒に楽しく取り組んだことが何よりも収穫でした。

今後も、島根県にとって環日本海交流は重要です。「中国、韓国などと並

んで、ロシアにも目を向けた勉強をさせたい」と、このような交流に期待もされています。史実を大切にし、海外への感心を持つことの大きな一歩となったのだと思います。

### ロシアとの史実で 隠岐全体がつながる

隠岐の島町のロシア兵墓地は、老人



美田小にて。島根県の国際交流員・クセニアさんの特別授業。

会で立派に手入れがなされています。その光景を見た有志の方が、日本海海戦で亡くなったロシアの水兵さんを偲んで、「島人の祈り」（作詞・橋本喜美子、作曲・広江政仁）という曲をつくり、CDに収められ、ロシアへの出発前には広く町民に理解していただくためのコンサートも開催しました。ピエナーレへも作詞作曲のお二人が同行、



島前の小中学生の習字作品を手にするロシアの子どもたち。

ロシアの方々には生演奏で聴いていただくチャンスがあり、大きな反響も得ました。

また、お隣の中ノ島・海士町も、ロシアとのかかわりがあります。明治三十八年一月、旅順開城の会談がおこなわれた際、降伏したロシア側の司令官・ステッセル將軍から日本の乃木大將に自らの愛馬（アラビア産の牡馬）が贈

られました。その友情の印は、ステツセル將軍にちなんで「寿(す)号」と名付けられ、日本の馬匹改良に貢献してきました。その後、数奇な運命を経て海士町の崎地区に渡り、最後を迎えて立派な「名馬寿号之墓」が建てられ、毎年の命日五月二八日には、例大祭が行われています。

このような情報も交えながら、地元海士町の歴史研究会の方々とも交流が再度行われるなど、民間の動きが行政を巻き込み、このたびの「ウラジオストク・ビエンナーレ」の島根紹介のパンフレットにも「寿号」のことが大き

## にしのみま 西ノ島 data

日本海に位置する隠岐諸島のなかで2番目に大きい島。面積56.01km<sup>2</sup>、人口約3,500人。起伏に富んだ地形で、東西に連なる200~300mの山々が島を二分している。天然の良港ともなっている内海側に集落が点在し、海蝕海岸が連続する外海側、なかでも国賀海岸は隠岐を代表する景観として有名。山地には牛馬が放牧され、かつては畜産と畑作を組み合わせた牧畑が行われていた。現在は漁業を中心に畜産、観光が基幹産業となっている。



くとりあげられました。

課題山積みの隠岐地域ですが、ささやかな活動から現状を少しでも変えていくことが行政を動かすことにもなり、地域の自立にもつながると思います。

いままでの事業展開にあたっては、会員の会費をもとに、(財)しまね女性センターの「公益信託しまね女性ファンダ」<sup>ド</sup>、西ノ島町の「いきいき集落活性化事業」、島根県の「国際交流事業」などのさまざまな補助制度を活用し、活動資金の一部に充当してきましたが、時代とともにその資金も減少傾向にあります。今後は、後輩の育成もつねに意識

しながら、行政や学校とも協働して、運営にも工夫を凝らし、教育を通じて集い、情報交換することが「これからの西ノ島を語る町民ができる」ことであり、人と人とのつながりを大切にしていきたいと考えています。

※注・副読本の「海を越える愛」によれば、隠岐島後では西郷の「日本海海戦露国軍人墓」をはじめ、今津・加茂・大来・大久・都方・布施などでもロシア兵の遺体が葬られた。露国軍人墓には、「日本海海戦の時、漂着した露国軍人の遺体を埋葬供養する。みたまの世界には国境は存在しない。どうか安らかに眠りたまえ」という意味の言葉が日露両国語で碑に刻まれている。

## 佐倉真喜子(さくら まきこ)

昭和11年島根県隠岐郡西ノ島町生まれ。まちづくりグループ「ひめぼたるの会」代表。島根県職員として40年間、保健予防活動を中心に勤務。その後、精神障害者作業所の所長を8年間勤め、作業所から小規模通所授産所への移行に尽力した。1期4年、西ノ島町初の女性町議として活動。人と人とのふれあいの場を設けることが大好きで、現在は次世代を担う人づくりを目標とした活動を仲間とともに企画参加。自身の健康維持のため、スイミングやフラダンスも楽しんでる。